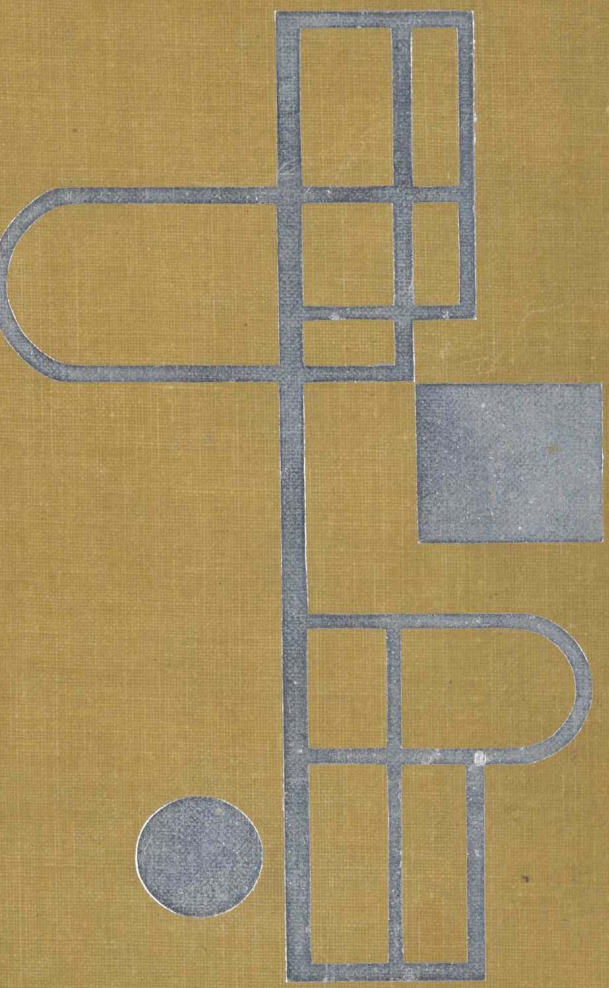
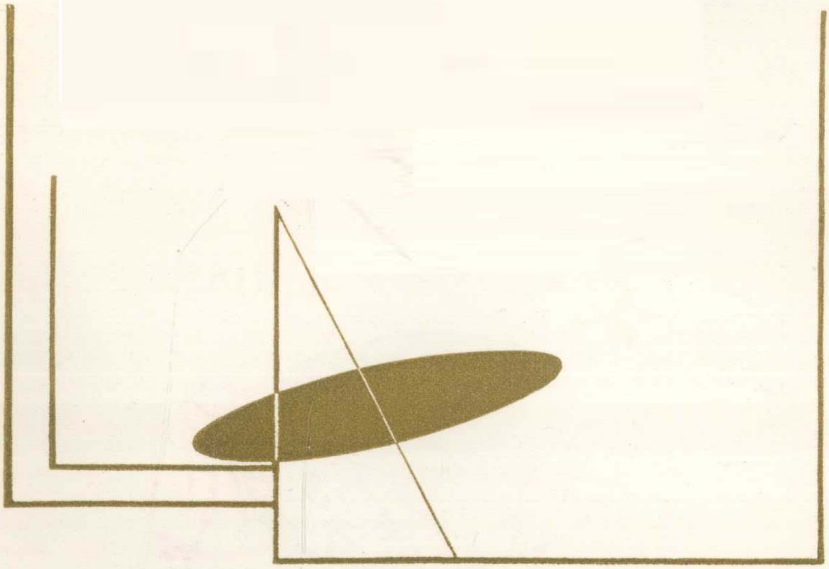


昭和小說集(二)

現代日本文學全集 87

昭和小說集

（二）



筑摩書房版

現代日本文學全集 87

昭和小說集（二）

昭和三十三年三月二十日　印刷
昭和三十三年三月二十五日　發行

著者代表　淺見淵

發行者　東京都千代田區神田小川町二ノ八　古田晁

印刷者　東京都青梅市根ケ布三八五　山田一雄

發行所　東京都千代田區神田小川町二ノ八　筑摩書房
〔電話〕東京二九局（29）七六五一（代表）
振替　東京一六五七六八

製本　株式會社高陽堂
印刷　株式會社精興社
整版　株式會社精興社

昭和小説集(二)　目次

眞杉靜枝
小魚の心……五
淺見　淵
コップ酒……一四
新田　潤
煙　管……二四
張　赫宙
權といふ男……三六
中谷孝雄
春の繪卷……五三
本庄陸男
白い壁……六二
榊山　潤
街の物語……七七
大谷藤子
須崎屋……九七
豐田三郎
弔　花……一〇九
福田清人
脱　出……一二二
矢田津世子
神樂坂……一三七
高木　卓
遣唐船……一四九
小田嶽夫
城　外……一七一
十和田　操
判任官の子……一八二
鶴田知也
コシヤマイン記……一九八
大鹿　卓
福壽草……二二三

澁川　驍
臍繰物語……二二七
中村地平
南方郵信……二三四
荒木　巍
自殺未遂……二四八
富澤有爲男
法　廷……二六一
中里恒子
日光室……二七五
寺崎　浩
一　家……二八五
長谷　健
あさくさの子供……二九八
寒川光太郎
密獵者……三二八
上田　廣
或る日の水間部隊長……三四三
芝木好子
青果の市……三五二
石塚友二
松　風……三七一
八木義德
劉廣福……三八三
島村利正
仙醉島……三九六
解　說……四〇五
年　譜……四一九

裝幀　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和小説集

(二)

小魚の心

眞杉靜枝

一

上野の表慶館に「宗達」の繪が幾點か出てゐるといふので、陳素一氏は、午後からそれをみに出かけた。

薄暗い表慶館の中で、硝子の中に並べてかけられてある、幾點かの宗達の繪を、しばらく素一氏は見詰めてゐた。

この繪は、前にもある新聞社の主催で開かれた、國寶美術展覽會の時見たことがある。それを見た時は、お梶をつれて來たが、と思ひ出すと素一氏は、今日そのお梶に、上野の友人の家で會ふことになつてゐることを思ひ出した。

黑いマントを着た姿で立ちあがり、も一度硝子に面をすり寄せて、宗達の美しい線を眺めてから、急ぎ足で館外へ出た。

庭園の芝生の上が、あざやかに燃えるやうに黃色い。銀杏の葉が、一面に落散つてゐるからだ。

十一月の靄が、樹間を薄く包んで流れてゐる。驚くほど大きな月が、靄の上に白く出てゐた。

民家が押し並んでゐる、櫻木町のある一軒の家へ、素一氏ははいつていつた。

「お梶は、來なかつたかね？」

出て來た青年に、達者な日本語で訊ねた。

「いゝえ、まだ來てゐません」青年の日本語は、素一氏よりずつと、發音が幼稚だ。

お梶が來るのなら、彼女は、初めて來るこの家の場所が判らなくて迷つてゐるかもしれない。といつて、青年はすぐステッキを持ち、表通りまで迎へに出かけた。

家人のゐない、ひつそりした家の中で、素一氏は一人で二階へあがつた。

二階の廣い座敷は、すつかり主人の青年が、最近中國から持つて來た家具で調へてある。

素一氏は、この室の客になると、なぜか、いつも議壇にでも立つたやうな、緊張した氣持になるのであつた。中國の家具には、素一氏の身にしみわたつてゐるのと同じやうな、あの重苦しい祖國の雰圍氣がしみついてゐる。素一氏は二階へあがると、その敷物の上を行つたり來たりしながら暫くある感慨にうたれるのが常であつた。祖國においてきた、これと同じやうな自分の家具等のある室のことを思ひ出す。その室内に於いての、ある夕方のことを、まざまざと思ひうかべるのである。自分はあの室で、食事をしてゐた。恰度夕暮れで、灯がついてゐた。いきなり二人の兵士がそこへはいつて來て、自分の卓に置いた命令書を、何氣なく、自分は手にとつてみたのであつた。

それは、捕虜になつた二名の反軍の將を、即時銃殺にせよといふ命令書であつた。

いつもかういふ命令書が來る時には、默つて自分はそれに捺印せねばならない、そしてそれによつて數刻の後には、少しはなれた兵營のあたりで銃聲がきこえる。だが、その夕べは、特に自分はなぜか又してもその銃聲を耳にせねばならないことに堪へられなかつた。

「喫食中なり、乞一刻の猶豫。」

といつたが、兵はそれに對して至急だといつた。察するにすつかり銃殺の用意が出來て、自分の捺印だけを待つことになつてゐるらしい。

自分は印をとつて、命令書に捺し、而して報告書にも捺すべく一枚をめくつた。そして、寸刻の後に銃殺される人間の名前を見た。

字が眼にうつると同時に、自分は叫び聲をあ

げて立ちあがつた。頭の中で血が熱湯になつたやうな氣がした。林萬春、といふその名前は、自分にとつて忘れ難い名であり、腦裡に消えたことのない面影である。幼少の頃から、日本へ留學するまでずつと一緒であつた親友が、今自分の手に依つて銃殺されねばならないところへ來てゐることを、自分は知らねばならなかつた。身をひるがへして、自分は、背後にあつた窓邊へいつて立つた。暗い夜空に重なりあつた、黑い屋根の彼方の兵營のあたりには、赤々と灯が闇に映えてゐる。赤々とした灯は、庭に於いて既に銃殺の用意の出來てゐることを語つてゐる。そこで今殺されようとしてゐる友の心中を思ひ、友の運命を思つた。少年期の彼はいつも、自分の肩を突くやうにして、熱を帶びながらいつてゐた。青年國民軍を支持して、自分は中國を救ふのだ、と。彼はやつたのだ。自分は、突然大聲をあげて泣きたかつた。

しかし間もなく、自分はいつものやうな銃聲をきいた。

階下で、格子戸の開く音がしたので、素一氏は急いで降りていつた。

紺絣の着物を着た青年のあとから、お梶の黑い帽子と、同色のオーバを着た姿がはいつて來た。

「すつかり、道を迷つてしまつて。」

お梶は、途方にくれてでもゐたやうに、頓狂な聲を出して赤く染めた頰を此方に向けた。

階下の、庭に面した日本間へ、青年は彼女と素一氏を案內した。

お梶はオーバを着たまま、窮屈さうに座布團の上に坐る。瀨戸火鉢には炭火がはじいてゐる。頭上の電燈をつけてみると、小さな半間の床の間には、「金冬心」の繪の見ごとな複製が、表裝してかけてあつた。

「あ、これはあれだ。」

思はず素一氏は立ちあがつて繪の近くにいつた。

「あゝ、あれですね。」

お梶も笑顏でいつた。あの時に淺草の田原町の本屋でみつけた複製と同じだ。二人はその調子の高い煮詰つた金冬心の小さな風景畫から、照り反されるやうな心でしばらく言葉を呑んだ。

この複製を、初めて日本の古本屋の埃の底から見つけ出した時の素一氏の感激はひどかつた。お梶も、一緒になつて亢奮して複製を抱へて店を出てからも二人の步調は思はず速くなるほどだつた。

「私、金冬心、大好き。」

步きながらお梶は力をこめて言つた。モデル女をしてゐたお梶に、本當に畫が解るのかしら、と素一氏は思ふのであつたが、素一氏の心のよろこびが通じて、それであんなに幸福がつてゐるのかもしれないと思ふと、素一氏は、步きながらマントを開いて、お梶の小さな肩を抱いた。

けれど、本當はお梶にも、その畫のよさは何となく解つてゐたのだ。

小さな笹の葉や、屋根瓦の波なぞの克明で、力强い筆致には、何か、ぐつと胸を支へられるやうな力を感じたのだ。

二人はその頃は、每日一緒であつた。その頃から五年も一緒に暮したのであつたが——

素一氏が、日本へ移住して來て一年目位ゐから、繪を描き初めて、その時モデルに雇つたのが、お梶であつたのだから、二人は知りあつてから九年にもなるわけだ。

お梶はモデルの業をやめて、素一氏だけのためにモデルになり、その他、素一氏の日本に於ける生活の全部にとつて、なくてはならない女の生活をするやうになつて、それが恰度五年續いたのであつた。

五年目に、素一氏の夫人と子供が、突然支那から、家庭生活をするためにやつてきたので、お梶の方から素一氏に別れたのである。

「僕には、君をおいて、他に妻はない。」

素一氏はさういつてその時泣いたが、お梶はきかなかつた。そのくせ、お梶も死ぬのではないかと思ふほど泣いてゐた。幾日も、子供を死なせた兩親みたいに、二人は泣きあつてから別れた。

素一氏は、お梶に別れてのちの日本のくらしが辛らすぎて、いつそ、妻子を連れて支那へ歸らうかと思つたほどであつた。

その後、お梶がどういふ生活をしてゐるのか、素一氏にははつきりとは判らなかつたが、只、時々今日のやうに、お梶の方から、友人として

の再會を求めてきた。
會ふ度毎、素一氏はきつと、いくらかづつの金を、お梶の生活に寄附した。只ひどく彼女の生活が經濟的に窮迫してゐることだけは認められた。
「その後、景氣はよいかね。」
床の間の金冬心から、眼をそらすと、靜かに素一氏は冗談ごかしてたづねた。
「相變らずよ、だけど、今日はもつと別なお話しで來たの。」
お梶は笑つて、しかしつぎにふと吐息をした。胸には、何かの憂慮がある。が、そのことはよけて笑へることだけを語らうと思つてゐるらしい。
「折り入つてのお話かね。」
素一氏は、うまい發音で一寸諧謔をいつて、しかし俯向いたまま、さア何でもききますよ、といふ耳の構へをする。
「只一寸、御相談してみるだけなんですけれど……」
と前置して、お梶は、今度ある人と、結婚しようかしらと思つてゐるといふことを告げた。
素一氏は俯向いたまま、一寸顏を引いた。いつもの癖である。話が少し尖つたことであると、ふと刃物でも前へ來たやうに顏を引く。が素一氏はすぐ頭でつぎの考へをもつた。
沈默を長くは續かせずに、素一氏は口ごもりながら言つた。
「それは、君にとつて一つの方法であるかと思ふ、しかしその結婚、幸福にゆくかゆかないかの問題は相手の人が、よほどいい人でなければならないが……」
それに對して、お梶は浮かぬ顏をしてみせた。お梶の方からは、少しも好きではないけれど、先方が、お梶を非常に好きなことだけはたしかなのだ、といつた。そして名前をいつた。
「矢張り、結婚が一番適當な生活だとするならば、君にはもつといい人がありさうに思ふ……」
素一氏は一二度出席したことのある、日本畫壇の集會の席で、お梶が今いつた名前の青年を見かけたことのあるのを思ひ出してさういつた。その人の名前と、不快な病氣を持つてゐるといふ噂が、素一氏の耳にはなぜか一緒になつて殘つてゐるのが、わびしかつた。
すると突然、お梶は坐つたまま、ほろほろ泣き出した。泪があふれるほど頰を傳ふと、半巾をとり出しながらお梶は笑つた。
「をかしな氣持……」
笑ひながら泣いた。
矢張り、生活費に困つた結果、お梶は結婚してしまはうと思つてゐるのだな、と素一氏は察した。
しばらく、お梶のすすりあげてゐる聲のそばで、素一氏は小さく呟くやうに、自分の氣持を述べた。
自分は、君と別れて、三年たつ間に非常に修業をした。今では、孤獨を愛せる氣持も、やうやく固められた。妻子の生活も近頃、どうやら落着いて來て、只この上は、お梶が幸福になつてさへくれたら、一層自分は落着けるであらうと常に思つてゐる——
「結婚してみても、どうも幸福になれるとは思へないわ。」
お梶は淋しいかほのままいつた。
幾時間かの後、二人はそこを立ちあがつた。麴町のいつもの畫房に、ブルデルのデッサンが來てゐるといふから、それでも共に見にいつてから別れようといふことになつた。
麴町までは、自動車でいつて、畫房の明るいシャンデリヤの下で、「男の腕」のデッサンが、重々しい額ブチにをさめられてある前に腰かけ、茶を接待された。
室の四壁には、いろいろの美術品がかけられてある。此處は素一氏とお梶と二人にとつての、古くからのサロンであつた。
同時にお梶は、素一氏に別れてから後、生活費の幾分かをこの畫房によつて得てゐた。素一氏に彼女が貰つた、エッチングや、硯石なぞは、大かた此處へもつて來て金にかへてもらつてゐた。
紙片をとり出して、素一氏はブルデルのデッサンの模寫をやり出した。
支那に於いては、やむを得ず軍務に服してゐたがそのほかに、文學者としての仕事を、多くしてゐたのであつたが、非常に好きでたまらな

かつた繪の方の仕事は、日本へ亡命して來てから、はじめてやりかけたのであつた。

「矢張り、ブルデルは、力が大きい……」と、感嘆したやうにいつて素一氏は模寫の鉛筆を投げる。自分の畫も、もう少しのところで、本當の繪描きになれるところだが、といふ。

畫房の主人は、模寫をとりあげて、

「先生、なかなか旨いです。」といつて、模寫を高くかかげてみたりした。

暫くして、二人は戸外へ出た。

「少し、散歩してみないか。」

素一氏は、眼鏡をかけた顏をお梶に向けていつた。二人は、ゆるい歩調で、黑い夜の廣い通りを富士見町の方へ歩いた。

もし、はつきり結婚するやうになつたら、お梶の住居に、まだそのままになつてゐる、素一氏の澤山の繪やノートブックといふやうなものを、全部引きとつて頂かねばならない。と、お梶はいつた。

「どうするかね、それは。」

と、そのことでは、少し當惑がほで、素一氏は相談的にいふ。お梶のところにあつた澤山な品物を自家へ引きとつて、今更、何も知らずに幸福がつてゐる妻子を驚かしてはならないと思ふのである。

「ぢア、明日の内に櫻木町のけふの家の方へ、皆、屆けておきませうか。」

さうして貰へば、一番いいと素一氏はいつた。

さういふ品ものの處置まで終るとそれで、二人のつながりは、立派にぬぐひ去られてしまふことになるのだと思ひ、歩きながら、二人の胸の中には、各々異つた感情があふれた。

素一氏は、靜かな聲でいつた。

自家に於いては、自分の妻は實に滿足しきつた幸福な落着きをもつて暮してゐる。彼女も、學生時代、日本へ留學してゐたので、日本へきても日常、遊び仲間に不自由はなく、その上、彼女は正しい男女生活の如何なるものであるかを解してゐないので、實に、その點では夫は有つてないやうなものであり、童女のやうな生活に、平氣で安住してゐる。といつて、

「けれどもね、自分は、その生活に落着きをつくつてしまつた。もうこれで、聖者のやうな生活を一生送れるつもりだ。」とつけ加へた。

お梶はわざと、背中でそれをきいた。そんなこと私の知つたことではない、知つたことではない。と思ふ。

だが、お梶は、どこかの暗い横丁にでも走つていつて、一人で聲をあげて泣きたかつた。素一氏と、その夫人との生活を考へるのは、お梶はからだが、けだものになるやうな氣がしていやであつた。只、夫人に、素一氏が幸福な男の生活をあたへられてゐないといふことが、

「どうした奥さんなんでせうね。」と言ひたいほど、お梶の心を泣かせた。

二

私、結婚の話は壞はしました。といふお梶の手紙を、素一氏は伊豆の溫泉にいつてゐる時に受けとつた。

同時に、突然、お梶に勤め口が出來て、月給が百圓貰へるやうになつたとかいてあつた。

お梶が生活に困らなくなつたといふことで、素一氏は、何より安心した。

手紙の終りに

「これから、私は白襷で、新撰組みたいな心で勉强します。今まで、あんまり貧乏や何かで、自分が貧弱な女になつてしまつた、その仇討なのよ。うんとうんと勉强します。(彼女は、素一氏と一緒にゐる時から、繪を描きはじめてゐた)」

と書いてあつた。

一日、素一氏が溫泉の宿から東京に出て來た折、麴町の例の畫房に立ち寄ると、奥から顏を出した房の主婦が、あわてて、

「あゝ恰度およろしいところへ、今お梶さんから電話がかかつて、電話で久し振りの長ばなしをしてゐたところです。一寸先生も電話にお出になりますか。」

と言つた。

素一氏はあわてて靴をぬぐと、疊の敷いてゐる電話室にあがつた。

「モシ、モシ。」

「まア、御機嫌よう。」

お梶の聲は昂ぶつて、それから暫く電話口で、笑ひが止まらない風であつた。うれしいのか、びつくりしたのか、もつと、大きな、いままで

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

とちがつた明るい氣持で、二人が電話機を持つてゐるのが、うれしいのか、ともかく、二人ともしばらく言葉がみつからなかつた。

「金に困らなくなつたか――？」

「もうその點では、大元氣よ。」

「あさましい奴だ。」

又お梶は笑つた。

「伊豆で、富士山を描いていらつしやるのでせう。」

「今度のは、會心の作になり得ると思ふ。」

「早く拜見したいわ。」

ありきたりのお世辭を言つてしまつたと、お梶は言ひ終りながら、いやな氣になつたりする。すると、素一氏は言つた。

「一度伊豆へ來てみないか。」

「大變よ、お邪魔だわ。」

笑へない氣持でぐつと胸の中が硬張るのを、わざと彈ねあげるやうな笑ひ聲にして答へた。

「土曜日から、日曜日一日は、毎週危險。――その他の日ならね。月曜日は最も安全だね。」

土曜日曜は、妻子が、宿を訪ねて來る危險があるといふわけである。

「ゆけたらゆきます。」

そんなことで、電話はきれてしまつた。

が、そのことで、素一氏は、足許に小波が起きてしまつたやうな落着きなさを感じはじめた。

今まで、お梶に別れて三年ほども、女を愛しない肉體上の苦悶にやうやく徹しきつて、今では、その中から何か透きとほつた或るものをつかむことさへ出來さうな心境になりかけてゐたのに、それが、惡寒がするやうに震へ出しさうなのである。

ああ言つたが、お梶が本當に伊豆の宿を叩いてくれねばよいが、又、お梶を待つ心に、いささかでもなつてはならないが、と、調子をとるやうに考へてみたり、又は、いつそ、お梶が來ればよい。人間生活にあたへられた自然なものを、歡喜して味了し、裸身の野性的な自分になるのも素晴しいではないか。

しかし、素一氏は、そのやうなことを、四六時中考へてゐる必要はなかつた。

伊豆の宿屋の好意で、附近の一軒の藁屋根の二階家を日中だけ借り受けてくれたので、その二階の窓口近く畫架をたて、窓から眼の前に見える富士山や、その他の、起伏した山々の姿を見詰めはじめると、心の中の諸々の凡慾は、全部たやすく征服せられた。

お梶が來ることも、來ないことも問題とはならなくなつた。

「帝掬芙蓉雪。
置之赤縣西。
凝作蓬崙山。
敢欲高低」

そんな賴山陽の詩を、肅然とした心で、墨筆をとつて白紙に立派な字でかいてみたいやうな氣持になる。

支那の南畫家などが、巨大な山とにらみあつて、それを、強い筆力で畫に描いてゐるのを見る度に、一度あんな巨大さととつ組んでみたいと思つたのであつたが、支那に於いては、それを果さず、かういふ他郷に於いて、このやうな淋しさの中に打ち捨てられてゐる際に、眼の前に悠然と、巨きくて秀麗な富士山が立つてゐてくれるといふのは、何といふ感謝せねばならないことであつたらう。

白い雪を頂いて、立ちながら、富士は、どうかね、元氣はあるかね、俺にとつくんで來れるかね――とでも笑ひかけてくるやうだ。

油繪具を、一刷毛一刷毛、まるで愛撫するやうに、素一氏は二十號のカンバスに塗りこみはじめた。巨大な山を、畫面に巨大に、がつちりと据ゑるには、巨大な力がいる。素一氏は夕方迄に、ヘトヘトに疲れた。たそがれ時、山々は只一色の紫色になり、暮れのこつた茜色の空の中にくつきりと浮き出る。

素一氏は、トボトボと一人で宿へ歸る。湯を浴びてのち、宿の下婢に世話をやかれて食事をとる。食事をしながらも、正面の壁に、今日の描きかけの繪をたてかけておく。首を傾向けるやうにして、繪を見詰めながら箸を動かす。明日はも一寸、空の部分に立體感をもたせなくては――と、一人呟く。

が、食後はゴッホやセザンヌ、ルーベンスなぞの、好きな畫家の畫集をあたりに並べたてておくに拘らず、どうしても氣持の落着きを持つことが出來なかつた。

しんとした田舍家の窓の外は、春の宵である

ために、音のない瀑布のやうに騷々しい。じつとしてゐると、皮膚の中で、何かがぽんぽんと音をたててはじけるやうにむづがゆい焦慮が起る。かういふ春の宵、お梶は來ないか。お梶が來て、この窓で共に會談できたら。

さうだ、話をするだけなら、よいではないか。話しあふだけだ。

さう思ふと、素一氏は立ちあがつて、筆をとりお梶に手紙をかいた。靜かな宿で、君と共に語るに相應しい窓がある。日歸りで出かけて來ないか。來るか來ないか、と待つ心は、實に馬鹿げて思へる。であるから、はつきり×月×日に來てほしい。その日都合が惡く、他の日に來れるなら、その他の日を知りたい。若し來たくないと思ふのであつたら、×月×日に、默つて來なければよい。

とかいて、素一氏は、それを散歩がてら投函しに出かけた。

その×月×日は晴れた日であつた。富士山は銀色にまぶしく輝きながら、時々雲の上から頂上の姿を現はしてゐた。

その富士の突端の輝く姿を、お梶は、東京で省線の中央線の窓から眺めた。雲に包まれながら、その山は空の果てに、小さく白銀色に輝いてみえてゐる。

その山の彼方で、その山を見詰めながら、繪筆をにぎりしめてゐる人の、淋しさに打ちかつた姿をお梶は想ひうかべた。その人は今日、お梶が出かけてゆかなかつたことを、「かへつて來てもらはなかつたために、自分はより一層偉大な人間になる力をもつた。」といふふうに受ける人だと、お梶は思つた。淋しさに弱りきらないで、ますます力強く生きてゆかうとする素一氏だ、とお梶は考へた。

お梶の生活には恰度この時分、少し幸福のきざしが芽生え初めてゐた。お梶は、春吉といふ人を見つけたのだ。春吉がお梶を見つけたのかもしれない。或は二人共、何も見つけなかつたのかもしれない。とにかく、成人した大人の心も一瞬間、子供にしてしまふやうな、魔力のある戀愛が今から初まるのかもしれない、と思へる時期であつた。

だからお梶は、省線電車の窓が、別な視界を持つつぎの瞬間には、もう心の片隅にも素一氏の面影を殘してはゐなかつた。

それから三月ばかり、春吉と、毎日のやうに會つてゐたので、お梶は、そのまま伊豆の方へは手紙も書かなかつた。

春吉は眞面目な性であつた。お梶はいちいち驚いてばかりゐた。お梶を正面から、しつかりと見詰めて、そして、出來ればお梶と結婚したい、と春吉は考へてゐるのだ。

するとお梶は、こそこそと遁げ出したくなるのであつた。——勿論そんなに眞正面から御覽になつては、私は傷だらけです。御存知でせう、私にはあの異國人の素一氏があつたのだし、私はもう純眞な少女ではないのだし、それに、私は裸身で、いろいろの人のアトリエに立つ、モデル女でもあつたのですよ。それを全部御存知でせうね。——

といつてしまふかはりに、お梶は默つて、じつとりと冷汗を流して、春吉の前に坐つてゐた。

「づうづうしい女だわ、今に屹度罰をうけるでせう。」

自分自身に向つて、そんなふうに睨みつけるやうな眼をあてて、お梶は坐つてゐた。

その自分の眼に反抗するやうに、しなを作つた姿で、彼女は空を見あげる。

「あゝ、いい空だわ。」

お梶はそんなことをいつたが、實は空を見る心なぞないのであつた。

二人は、郊外地のある草むらの中に、各々のレインコートを敷いて坐つてゐた。曇り日で、夜空はどんよりと濁つてゐた。町の方の空だけが、赤い色に燃えてゐた。

春吉の靜かな白い顏が、浮き彫りみたいに笑つてゐる。お梶に、音樂は好きか、と訊ねる。自分は結婚生活の中に、音樂レコードなぞの撰擇の出來る妻を理想としてゐたのだが、といふ。

「私、音樂、大好きですわ。」と、お梶は答へる。

それで、一つお梶との結婚の可能な條件が出來たといふふうに、春吉が心で算へてゐるのをみると、お梶は又しても冷汗を流した。あゝ、とてもこの結婚の試驗には、通過出來る見込みはない。何はともあれ、こんなに自分の履歷には大穴があるのだもの、と心で悲鳴をあげる。

それほど春吉は、立派にみえる男であつた。春吉の性格には、一片も苦勞の曇りがない。幸福な境遇の中で、純粹な性格を傷つけることなく、すくすくと大人になつてしまつてゐる。苦勞を知らない世間知らずな氣持で、春吉は、お梶のやうな女を結婚の相手にとりあげて考へようとしはじめたのだ。

幾日か、お梶が冷汗を流してゐる間に、春吉はやがて、一つの考へをまとめたのであつた。

そしてそのことを、ある夕方春吉はお梶に話した。

話さねばならない、と心をきめて春吉は、夕方勤め先きの歸りに、築地の彼女の勤め先へ彼女を迎へにいつた。

そして築地から淺草近くの川べりまで、二人は子供のやうに手をひいて歩いた。都會が今、騷音をのせたまま、夕闇の底に沈まうとしてゐて、空だけが星を浮べて水底のやうに明るんでゐる。二人は、その空の何處かにゐる溫かい慈母を尋ねる子供のやうな、行きくれた、疲れた心で歩いた。春吉は時々吐息をした。お梶は、さうして歩くうちに春吉がその日何をいひ出さうと思つてゐるのか、もうよくわかつてゐた。

やがて二人は川べりへ出た。

コンクリートで出來た倉庫が、兩岸に並んでゐる。人影のないその倉庫の裏で、川面に眼を落しながら二人は佇んだのであつた。

丁度滿潮で、川は水量に滿ちてゐて、ポンポン蒸汽が時々その水面をどよめかせながら過ぎていつた。その度毎、コンクリートの川岸に、波が音たててくづれた。

「僕が……」と、春吉は重く口を開きながら、片足を太い錨の鎖にあげる。

「僕が、お梶さんに望んだことは、お梶さんに紋服を着せて僕のところへ、花嫁に來てもらふことだつた。」

春吉は、考へ考へ言つた。

「さもなければ、お梶さんと最も美しい友人になることだ。この二つしか望めないと思つてゐた。」

しかし、お梶と結婚するのは、いろいろ考へてみると、どうも自分の兩親なぞが絕對に反對するであらうと思へる。殘るところは、お梶と友人として立派につきあつてゆくことだといふのであつた。

さうにきまつてゐると思つたわ、と心の中で呟きながら、ふと、お梶は水面に眼を落したまま泪ぐんだ。

が、お梶は、不思議とこの時心が淨められるものを感じてゐた。このやうに純粹な性格の人には、もう會へない、と思へるのであつた。さう思へるほど、春吉を好きになつてゐることで、お梶は滿足出來さうなのであつた。このやうに、男の人を愛せるといふことはめつたにあり得ないことだから、その點だけで、心を淨めてこれからも、聖女のやうに生きてゆかなくては、と、お梶の心は、さういふところに、しつかりと氷りつくのであつた。

その夜、いつものやうに夜更けまで二人は田舍路を歩いた。そしてお梶の家近くの、ある草むらに來ると、二人はその中へ分け入つて坐つた。

お梶は、このやうに、春吉を愛してゐる自分の氣持が、大切で堪らないのであるが、にも拘らず、幾年かたつうちには、自分は屹度こんな氣持をけろりと忘れて、又別の人を好きになつてゐるやうなことがあるのではないか、と思ふと、さういふ生き方も亦肯定せねばならないやうならいつそ命を斷ちたいと思つて、ふと春吉の膝の上に泪をこぼした。

春吉もなぜか泣いた。春吉が、何を泣くことがあるのだらうと、お梶の方は心が白けるのであつたが、それでも二人は、暫く首を重ねあつて泣いた。

白麻の背廣を着た春吉の胸のあたりが、お梶にはミルクみたいに、甘く溫かいものに思へて、その中に鼻先を埋めるやうにして、お梶は泣いた。こんな溫かい胸には、もう會へない。とお梶は思ふのであつた。

けれど、そのやうな夜があつたのに、又幾日かの後には、お梶はトランクを提げて、春吉の部屋へ移り住んでゐた。

そしてそのおかげで春吉が、打ちひしがれるやうな倫理的な苦惱に悶える有樣を見ながら暮すことになつた。

春吉の純潔さにとつては、內緖で女と暮すといふやうな後暗らさは、堪へられないことであ

るらしかつた。

春吉は、酒に醉ふと、

「俺は、こんなに惡い奴だのに、ある友達が、俺のことをいい奴だと、かひかぶつてくれるのがつらい。」

といつて、大聲をあげて泣いた。

お梶が元氣よく立ちあがつて、春吉と別れられる日がありさへしたら、すぐに別れなければ。と春吉は考へながら暮してゐるのであつた。

朝の味噌汁を吸ひながら、二人して別ればなしをしながら泣いたりする日もあつた。

そのやうに春吉が苦しむので、お梶はいつの間にか、自分の姿が、魔物の影のやうな、非常な惡いものになつてしまつたやうな氣がして、犯罪を犯してしまつた人のやうに、落着きなく眼を見張つて暮すやうになつた。

勤め先きの方も、大方缺勤してしまつてゐた。

春吉が出かけて留守になると、お梶は何度も、トランクを片附けてそこを出てゆくことを考へてみたけれども、なんとなく影のやうに自分の姿が薄くなつて、何處へいつても生きてゐられさうに思へないのであつた。

それで、毎日、春吉の部屋の窓から見える市ケ谷の士官學校の丘を、ぼんやりと見つめながら暮してゐた。

そのやうな生活のある日、お梶は、勤務先きの歸りに何氣なく、麴町の畫房に立ち寄つた。

「もう、ながいこと、陳先生もおみえになりませんが、どうしていらつしやるのでせうね。」

と房の主婦は言つた。

お梶は、そこに腰かけると、つい、近頃の生活を打ちあけて、語つてしまつたのであつた。

「まあ、そんな問題で、あなたは、又、お泣きにならなけや、なりませんの……」

同情深い面持で、主婦は吐息をするのであつた。

すると、お梶が畫房をたづねた翌日、めづらしく素一氏が、その畫房へ姿をみせたのであつた。

もう、町は、あわただしい初冬の日暮れであつたが、素一氏は伊豆の宿から一寸上京したついでなので、手に丸善あたりの買ひものをさげてゐた。

恰度、房の主人は、關西方面へ旅行中であつたので、主婦が、いそいそと、久しぶりの來訪を迎へた。

「昨日、お梶さんが久しぶりで、みえましたよ。」

「さう、元氣にしてゐましたか。」

壁にかけられてある岡田三郎助の油繪をみてゐた素一氏は、一寸、刃ものでもつきつけられたやうに首を引いたが、すぐ、何氣なささうに言つた。

「あまり、元氣でもありませんでした。」

しばらくして、素一氏と主婦とは、美術品にとりまかれた室内の椅子に、向きあつて腰を降した。そして、主婦は、お梶がいま春吉といつしよにゐる有樣をひととほり素一氏に話したのであつた。

俯向きながら、默つてそれをきいてゐた素一氏は、きき終つてからも、その姿勢のまま、何も言はなかつた。

話し終つた主婦は、一寸、手もちぶさたになり、

「さあ、もう、すつかり日がくれましたね。先生、いつものやうに、何か丼ものでも、おとり致しませうか。」

と言つて立ちあがつた。

「さうね、何か簡單なものをとつてもらはうかね。」

主婦が立ち去つたあと、素一氏は、懷ろから、いま買つてきたばかりのものらしい「八大山人」の畫集をとり出した。

しばらくそれを膝の上において、じつとみつめてゐたが、やがて、室の隅にしつらへてある、硯と、二三枚の色紙とをとつてきた。

靜かに墨をすり終ると、その八大山人の畫集の、ある一頁をあけて、小さな一ぴきの小魚を模寫した。魚は、大きな畫面の眞中に、ただ一ぴき小さく、しかも恐しいまでの鋭さで描かれてある。

それを色紙に模し終ると、素一氏は、それに讃をかき加へた。

「八大山人よ。明の石城府の王孫たりし君が、明亡びてのち、僧になり石窟の中にかくれて、かかる繪を描いた。

君は、その悲慘な戰亂の町を、狂人の眞似し

てわめき走り、命をつないでゐたのだ。
その運命にほとんど倒されかけたが、しかし、ますます自分の眞價を發揮し、內なる悲憤慷慨を君らしき形によつて繪面に描きあらはした。
君の繪にみゆる、追ひ詰められたる高貴な孤獨の魂。氷下に、眼を輝かして生きる、小魚の心。——」
かき終つて、ぼんやりと、それをみつめてゐるところへ、主婦が粗末な食事を運んできた。

（昭和二年作）

コップ酒

浅見淵

暮れの三十日である。

昨夜――と云つても今朝であるが、歸宅したのが三時近くだつたので、了助が起き出したのは、とツくに午が過ぎてからだつた。

昨日の午後、了助は櫻木町のYの所へ金を借りに行つたのであるが、Yは快く云つただけの金を貸して呉れ、なほその上に、「忘年會をやらう」と云つて、了助を淺草へ誘つて呉れた。了助がYに借りた金は、Yの紹介で、或る雜誌社に勤めてゐるYの親しい友人の所へ持込んだ了助の雜文原稿が、一月にならなくては金にならないので、その金をYへ廻すことにして融通して貰つたのであるが、……金を借りた事ばかりでは無い、了助はYに會ふたんびに、此處彼處のうまいもの屋に案内されてゐて、しかも酒好きな彼は、いい加減醉ひが廻つて來ると、「もう一本」「もう一本」と銚子を追加して、何時もYに迷惑ばかり掛けてゐるので、淺草行きを誘はれても、直ぐに「うむ」とは云へなかつた。それに、家を出る時、妻から、「後生ですから今日だけ、Yさんとこでお金出來たら、直ぐに歸つて來て下さいね」と、云はれてゐた。だが、結局、同座してゐたTにも勸められて、了助は淺草へ連れて行かれ、「都」といふ小料理屋で看板迄飲み、其處を出ると又カフェへ引張つて行かれたりして、「要らない」と云ふのに、無理無理にTから五十錢銀貨二枚握らされて、圓タクに乘つたのは二時間近だつた。その頃から篠突く雨になつたが、巢鴨の刑務所の傍を走つてゐる時、「雨に雪が混つて來ましたよ」と、運轉手は了助を顧みて云つた。

了助は餉臺に向つて食事をしながら、不圖、昨夜の運轉手の言葉を憶ひ出して、硝子戸を透かして見たが、武藏野鐵道の引込線である霜枯れた草土手の上に、薄雲りした空が擴がつてゐるだけだつた。

了助の妻は、Yに借りて來た金と、二三日前にE社から取つて來た稿料とで、小さな借金も拂へてどうやら年が越せさうなので、昨夜了助の歸宅が遲かつたことにも、何時ものやうに不平を云はなかつた。

「濟みませんけど、質屋へ行つて來て下さらない？……あたし、今日は忙しいんですから」

食後の煙草を燻らしてゐる了助の顏を見て、いくらか浮き浮きさへして云つた。「それから、序でに土岐さんとこへお寄りして、赤ちやんもお連れになつて、元日に皆さんで行らつしやるやうに仰有つて來て下さいな」

了助も久振りでのうのうとしてゐた。正月から了助と土岐とが云ひ出して、又昔の友達たちと同人雜誌を出すことにしたのであるが、その創刊號に出す小說に書き惱んで、月の半ばを冗に過ごしたのである。のみならず、その小說は結局失敗に終り、……固くなるからいけないのだ。見てくれを氣にせずに、日記でも附ける積りで書きたいことを書き飛ばせばいいのだ。さう心の中で獨語ちて、自分自身を慰めるのであつたが、一方、幾年振りかで小說に手を附け、これで何度目かの失敗なので、自分の才能もこれつきりかといふ深い絕望感に襲はれ、暗い氣持に陷ちて行つた。了助はその暗い氣持に苛まれ乍らも、年末が氣になつて、十日餘り徹夜して、詰まらぬ賣文原稿を六十枚許り書き飛ばしたのであるが、こんなやくざ原稿を書き飛ばすからこそ、愈々小說が書けなくなるのだと、又

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com